

重点目標	共通項目	具体的取組	主担当	現状(H27年度結果)	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	達成度(A+B)%	判定	年度後半の方針・方策
1. 学力向上と指導力向上		①基本的な学習ルールの定着	生徒指導部	学習マナーの繰り返し指導を行ったことで、一人一人の学習に対する姿勢が良くなってきた。しかし、全児童が良くなってきたとはいえ、個人差が見られる。また、筆箱点検により筆記用具がそろい不要物を持ってこなくなった。今後もマナーの再確認をするとともに、生徒指導の3機能を生かした学習を進めていく。	学年に応じた学習ルールが身に付いている	A: 90%以上の児童ができる B: 80%以上の児童ができる C: 70%以上の児童ができる D: 70%未満の児童ができる	<教員評価>①② 80% <児童評価>③ 73% <保護者評価>③ 76%	C	聞き取り又はアンケート調査等で、児童の言葉からも学習規律に対する意識や課題点を把握する。授業中は、聴く姿勢に重点を置き、既存の聴き方のルールを低・中・高別で再検討・改良して指導を行っていく。今後、児童自らが学習規律を大切にしていこうという自己決定を促せるように、実態の把握と適切な指導に力を入れていく。
		②繰り返し指導による漢字力や計算力の定着 (朝学習・パワーアップタイム・宿題等による補充学習の継続的取組)	学習部	家庭学習強化週間や特設の補充練習時間などの全校統一テスト前の取組を重点的に行った効果は大きい。しかし、テストの難易度を上げた分、100点達成率はやや落ちてしまった。今後は、難易度を上げて達成率を維持できるように、取組を続けていく。合わせて、日頃から漢字を正しく使う習慣をつける。	当該学年の漢字や計算が身に付いている	目標値 低学年90点以上 中学年85点以上 高学年80点以上 A: 目標値90%以上 B: 目標値80%以上 C: 目標値70%以上 D: 目標値70%未満	<教員評価>③ 89% <児童評価>⑥ 95%	A	統一漢字・計算テストの点数が全体的に上がったことで、児童は達成感を得ることができたのだと思われる。今回の結果が次回の意欲につながるように、全校の事前の取組を共通にし、繰り返し練習に重点を置くことを続けていく。
	◎	③表現する力の育成 (書くこと)	学習部	ちよこつと作文では、テーマに合わせて時間内に書ける子が増えてきたが、評価テストなどでは、問題の条件を満たした書き方ができていない。また、問われていることに対して、言葉足らずな解答が多い。今後は条件を設定した作文に取り組みさせることにより、条件を満たした書き方ができるように指導していく。	自分なりの考えを書くことができる	A: よくあてはまる (90%以上) B: だいたいあてはまる (80%以上) C: あまりあてはまらない (70%以上) D: まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>④ 100% <児童評価>④ 89%	A	「ちよこつと作文」で短作文指導を行ってきたことは、児童の書く力につながっていると思われる。また、行事や授業における振り返りなど、書く機会が多いことも、書くことへの抵抗を和らげていると思われる。しかし、条件に合った書き方は十分とは言えず、「ちよこつと作文」に条件作文を増やし、指導の時間を確保していく。
	◎	④表現する力の育成 (半具体物や言葉・数・式・図などを用いて、自分の考えを話す)	学習部	理由をつけて話すことは、少しずつ身につけてきている。しかし、自信が持てず話せない子も多い。また、書くことと同様、内容が曖昧であったり足りなかったりすることがある。相手意識をもって、質問に対する的確な答え方を指導し、よい話し方、聴き方を広げていく。	自分の考えを根拠を示しながら話すことができる	A: 80%以上の児童ができる B: 70%以上の児童ができる C: 60%以上の児童ができる D: 60%未満の児童ができる	<教員評価>⑤ 78% <児童評価>⑤ 77% <保護者評価>④ 86%	B	算数科の授業を中心に理由をつけて話させることを意識してきたが、やはり、説明したり意見を交わしたりすることに自信のない子が多い。今後は、授業における話し合いの場を工夫しながら、話す・聴くスキル練習も試みる。一方で生徒指導部と連携し、聴く態度の向上を目指す期間を設定し、児童に意欲をもたせられるような取組を工夫していく。
	◎	⑤家庭学習の充実と習慣化 (学年×10分の定着)	学習部	なかなか習慣が身につかない児童の指導が難しい。家庭学習強化週間や連絡帳チェックなどの全体の取組をさらに進める。また、保護者の協力もおおき学習時間の記入を行うなど習慣化を図っていく。自学の指導を行い、自分に合った実のある学習ができるようにする。	毎日、決められた時間の家庭学習を行っている	学年×10分として A: 90%以上の児童ができる B: 80%以上の児童ができる C: 70%以上の児童ができる D: 70%未満の児童ができる	<教員評価>⑥ 78% <児童評価>⑦ 87% <保護者評価>⑤ 78%	B	各担任が児童に声を掛けたり家庭と連携を取ったりして、宿題を忘れる児童は減ってきている。保護者の意識も高まってきていると思われるので、家庭との連携を継続し学習習慣の定着を図っていく。さらに、学年×10分に見合う内容の学習ができるよう、よい学習の仕方や自学の内容を全校に広めていく。
	◎	⑥読書量目標値の設定と到達促進の取組 (児童委員会活動、教職員や司書による本の紹介、読書カード等)	学習部	高学年がよく本を読むようになり、新幹線読書の取組では100%の目標達成率である。しかし、読書に積極的ではない児童も多い。全体の取組を進めると同時に、クラスの中でその子に合った本を薦めたり、借りる時間をとったりするきめ細かい働きかけも行っていく。	読書量の目標値を設定し、到達のための手立てが工夫されている	A: よくあてはまる (90%以上) B: だいたいあてはまる (80%以上) C: あまりあてはまらない (70%以上) D: まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>⑦ 80% <児童評価>⑧ 81%	B	読書の取組みである「能登半島一周」が学校全体で目標を達成させるものだったので、全体では読書冊数は増えているものの、個人の意識が弱くなってしまった。二期は、個のデータを担任や児童に知らせ、意識が高まるようにする。また、児童が興味をもち、落ち着いて読書できるように、時間の確保や選書について、担任に働きかけていく。
	◎	⑦授業におけるタイムマネジメント	学習部	授業づくり自己診断表で授業の流れを考えていることで、課題からまとめまでのタイムマネジメントはほぼ達成でき、ねらいとの適合性も意識している。今後は、ねらいにあった適用題、さらに振り返りまでを1時間のスタイルとして取り組む。	学習展開のまとめまで到達している	A: よくあてはまる (90%以上) B: だいたいあてはまる (80%以上) C: あまりあてはまらない (70%以上) D: まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>⑧ 89%	B	学校研究や学力向上を意識し、学習内容の理解や集団解決に時間をかけ過ぎると、まとめまでいけなくなるということが出てきた。児童にどんな力をつけたいかを念頭におき、1時間のねらいや課題を考えるようにする。そして、本時のねらいに合わせた学習内容とタイムスケジュールを考えていく。

	◎	⑧校内研修を通じた指導力向上 (外部指導者招聘, 校内研究会の活性化, 相互授業参観, 外部研修への積極的参加と還元等)	学習部	研究授業で得たことを共通理解し, アタックポイントとして日々の授業で共通実践してきた。個々の実践を全体に活かせるよう, 次の研究授業で成果を検証し, 積み上げができるようにしていく。相互授業参観においても研究の重点を意識し, 交流する。	校内研修を通して, 指導力向上に取り組んでいる	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>⑨⑩ 95%	A	導入の仕方や課題作り, 話し合いの仕方に取り組む, 研究授業ごとに成果や課題が明らかになっている。しかし, その後の検証が十分でなかったため, しっかり検証を行い, 2学期につなげていく。2学期は, 事後研の持ち方も見直し, 日々の実践に活かせる内容まで話し合いを進めていく。
	◎	⑨各種学力テスト結果を生かした学力向上の取組 (4月:国, 県, 町学力調査 12月:町学力調査)	学習部	学力テストの全体分析から年間計画の中に位置づけた重点や日常の取組を実践していく。さらに個人分析もしっかり行い, 個の力量をつかんだ指導を進めていく。学びのロードマップを作成し, 2回のPDCAサイクルと短期のPDCAサイクルを実践していく。	各種学力テスト結果を生かした学力向上の取組を積極的に行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>⑪⑫ 82%	B	学力向上プランを意識して, 日頃の授業を行ってきた。その検証を行い, 改善して2学期の取り組みを進めていく。学びのロードマップの共通理解が不十分なために, スムーズに動けなかったところがあったので, 今後は声を掛け合い連携を図りながら取り組んでいく。
	◎	⑩情報機器を活用した授業実践	情報担当	機器の整備, 簡単に使える機能の紹介により, 集会や発表等での情報機器の使用が増えている。授業実践を推進していくために, 校内OJTを充実させ, 他の教職員への研修報告や実践報告等で活用していく。	情報機器を授業に活用している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>⑬ 100%	A	これまでの校内研修等の取り組みにより, 情報機器を活用しての授業実践が多く見られるようになった。さらに多様に情報機器を活用できるように, 簡単な操作マニュアルを作り提示したり, 情報機器を効果的に活用した授業実践を広めたりしていく。
2.豊かな心の育成と生徒指導の充実		①その場に応じた正しい言葉づかい, 思いやる言葉づかいの育成	生徒指導部	少しずつではあるが思いやりの言葉が増えてきている。しかし, 場に応じた正しい言葉づかいにはあまりつながらなかった。今後, それぞれの場でどのようなことを相手に伝えたいのか, そのためにはどのような言葉づかいがよいのかを繰り返し指導していく。また, 学校での指導を学校だけでなくで発信し, 家庭での協力をお願いする。	場に応じた正しい言葉づかい, 思いやる言葉づかいがきちんとできている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	<教員評価>⑭ 70% <児童評価>⑨ 74% <保護者評価>⑧ 78%	C	言葉づかいに対する意識向上が見られる。そこで, 児童がどんな言葉づかいがよくないと捉えているのかを調査し, 課題を明確にする。課題に出た言葉を減らしていくという目標を掲げ, 授業中や児童会活動等あらゆる場面で, 児童が自主的に声をかけ合ったり, よい姿を教師が褒めたりする場を作っていく。さらに, 学校での指導を各家庭にも積極的に発信することで, 子ども達のよい言葉づかいを目指して, 協力を得られるようにしていく。
	◎	②いじめのない温かい学級活動づくり	生徒指導部	人間関係作りを意識的に取り組んできたことで, 学級の中で自分がどんなことができるか, 人のために自分は何ができるのかを考えながら行動できる児童が少しずつ増えてきている。今後は個にも目を向け, 集団で関わりを持って学校生活を送れる力を育てていく。	「人間関係づくり年間指導計画」を活用している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>⑮⑯ 88% <児童評価>①⑪ 90% <保護者評価>①⑨ 93%	A	言っではいけない言葉は使わないなど, 児童の意識向上がたまたかな人間関係づくりにつながっている。しかし, 友達との関わりがなぜ大切なのか考える時間が, 十分に確保されていないという課題もあった。年間計画に基づく活動例を提示したり, 言葉やあいさつの大切さを指導する時間を十分に確保したりすることで, 思いやりのある学級づくりを目指していく。
	◎	③主体的に取り組む特別活動	特別活動担当	高学年に少しずつ学校全体を良くしようという意識が備わってきた。しかし, 主体的な行動を発揮する場が少ないため, 日常の主体的な行動にはあまりつながっていない。今後は異学年交流の場などを増やし, お互いに成長する姿を目指していく。	ねらいに沿って主体的によりよい学校生活を築こうとする態度の育成に努めている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>⑰ 100% <児童評価>⑫ 98% <保護者評価>⑩ 98%	A	高学年は, 責任感を持って異学年交流に励んでおり, 徐々に良好な人間関係を築いているが, 主体的に低学年のお世話等を行う児童はまだ少ない。見本となる行動をとることが, 低学年から尊敬・感謝されることや自らの成長につながることに気づかせ, 主体的に活動する姿を目指していく。
	◎	④別葉を活用し, 重点項目を意識した統合的な道徳	道徳担当	具体的な取組を提案したことで, 統合的な道徳授業を行うきっかけ作りができた。また, ゲストティーチャー招聘によって授業の幅も広がった。さらに別葉の活用を推進していくためには, 年間指導計画の見直しや研修報告等を充実させていく必要がある。	重点項目を意識した道徳授業を行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる (80%以上) C:あまりあてはまらない (70%以上) D:まったくあてはまらない (70%未満)	<教員評価>⑱ 88%	B	別葉と年間指導計画を作成し, 内容項目が網羅できるようにした。夏休みに, 1学期の重点項目である「思いやり」についてふり返り, 現状の把握と今後の課題について考える。2学期は, ゲストティーチャーの活用を行い, 重点項目である「郷土愛」の充実を図りたい。

		特別支援コーディネーター	学習に支援が必要な児童や人間関係づくりに支援が必要な児童についての共通理解は図られてきた。今後は、特別支援校内委員会を定期的に関いたり、専門的な立場からの助言をいただいたりすることで、個別の指導計画を生かしてよりきめ細かな対応をしていく。	個別の指導計画や教育支援計画を作成し、有効活用している	A：よくあてはまる（90%以上） B：だいたいあてはまる（80%以上） C：あまりあてはまらない（70%以上） D：まったくあてはまらない（70%未満）	<教員評価>⑱ 78%	C 児童理解の会で支援の必要な児童の様子や手だてについて共通理解を図った。また、特別支援学校相談員を要請し、専門的な立場からの助言をいただいた。しかし、それらを日常の教育活動で十分生かしていないときもあった。今後は、教育支援計画を生かし、個に応じた支援を常に意識して取り組んでいく。	
3. 体力向上と危機管理の育成	◎	①早寝・早起・朝食の定着	保健安全部	保護者向けの生活リズム講座、睡眠の大切さについて取り上げたすこやか集会の取組で、意識の高まりは感じられたが、習い事やテレビの視聴等でなかなか身につかない児童がいる。今後も、年間を通して規則正しい生活を意識できるよう、健康パワーアップ大作戦の取組や全体・個別指導を行っていく。また、家庭の協力が得られるよう、様々な場を通して保護者に啓発していく。	早寝早起朝食の習慣が身に付いている	A：90%以上の児童ができる B：80%以上の児童ができる C：70%以上の児童ができる D：70%未満の児童ができる	<教員評価>⑳ 100% <児童評価>㉓ 94% <保護者評価>㉑ 84%	A 今後も継続して規則正しい生活を意識できるよう、健康スッキリ調査や健康パワーアップ大作戦に取り組む、全体・個別指導を行っていく。その際、規則正しい生活は全ての活動の基礎となることを、教職員が念頭におき指導していく必要がある。また、家庭の協力が得られるよう、今後も様々な場を通して啓発していく。
	◎	②体力・運動能力調査の実施・分析・取組	体育担当	スポチャレいしかわの取組は体育館に学年ごとの記録記入板を設置することで、挑戦する回数が増え、学校全体でスポチャレへの意欲が高まってきた。アジリティープランでは各学級が工夫し、楽しみながら取り組むことができた。今後も児童の実態を把握しながら挑戦する意欲をかきたてる取組を継続していく。	体力・運動能力調査による課題の取組を行っている	A：よくあてはまる（90%以上） B：だいたいあてはまる（80%以上） C：あまりあてはまらない（70%以上） D：まったくあてはまらない（70%未満）	<教員評価>(21) 89%	B 新体力テストの結果を平成26年度全国や平成27年度石川県と比較すると、男女ともに50m走の結果が低いことが見受けられる。そこで、萩野台アジリティープランPart2にも書かれているように、50m走が県平均を上回ることを目標として、体育の授業の準備運動で短距離走を取り入れたり、スポチャレ40mを強化種目にしたりして取り組んでいく。
	◎	③事故の未然防止に努めると共に、事故発生時における教職員相互の連携による迅速な組織的対応	保健安全部	マニュアルの徹底により基本的な防災意識や避難行動は身につけてきた。しかし、実際の災害では、状況に応じた対応や判断力が強く求められる。今後は、時間帯や避難場所を変更するだけでなく、想定や避難ルート等を考えた避難計画を作成し実践していく。	安全指導の実施と事故発生時に教職員相互連携による迅速な対応を行っている	A：よくあてはまる（90%以上） B：だいたいあてはまる（80%以上） C：あまりあてはまらない（70%以上） D：まったくあてはまらない（70%未満）	<教員評価>(22) 100% <児童評価>㉒ 94% <保護者評価>㉒ 100%	A マニュアルの活用や、訓練を何度も行うことで、基本的な防災意識や避難行動は身につけてきている。2学期には、地震・火災を想定した休み時間の非難訓練や予告なしの避難訓練を行い、いろいろな場面での避難行動の仕方を身に付けさせていく。教職員は、どんな状況においても児童の命を守るという観点で行動できるように意識して取り組む。
4. 開かれた学校づくりの推進と家庭地域との連携		①教育活動の積極的公開と情報発信（学校便り、学年便り、学校ホームページ等）	教頭	ホームページの内容が充実してきた。学校・学年便りもしっかりと発信できた。保護者や地域の方がホームページ、学校便り等をよく見ていただいていることに感謝し、これからも積極的な発信に努める。来年度は、ホームページに学年日より・保健だより・給食だよりなどを掲載し、多方面の情報発信をしていく。	学校・学年便り、学校ホームページ等を通して学校情報を発信している	A：よくあてはまる（90%以上） B：だいたいあてはまる（80%以上） C：あまりあてはまらない（70%以上） D：まったくあてはまらない（70%未満）	<教員評価>(24) 100% <保護者評価>㉓ 100%	A 保護者や地域の方がホームページ、学校便り等をよく見ていただいていることに感謝し、これからも積極的な発信に努める。今後は、ホームページに保健だより・給食だよりなどを掲載し、多方面の情報発信をしていく。また、学校だよりなどに児童の活動の様子や教育活動などをくわしく載せていくようにする。
	◎	②地域と連携し、太鼓を中心とした地域の伝統文化の継承	教務部	今年度も指導者の方々の協力を得ながら3地区の太鼓を練習し、運動会・敬老会・ござっさい祭りで、5・6年生が発表した。今年度は、6年生が模造紙に楽譜を書いて5年生に教えることができた。子どもから子どもへ伝えていく、このような取組を今後も大切にしていきたい。	太鼓の継承を積極的に行っている	A：よくあてはまる（90%以上） B：だいたいあてはまる（80%以上） C：あまりあてはまらない（70%以上） D：まったくあてはまらない（70%未満）	<教員評価>(25) 100%	A 指導者の方々の協力をいただいて、今年度の太鼓練習が始まった。昨年度の6年生が模造紙に残した楽譜を利用し、これから6年生が5年生に教えながら練習を進めていく。上級生から下級生へ伝えていくことがよき伝統となるよう、今後も練習や発表の機会を設けて取り組んでいく。
	◎	③幼保小及び小中連携の推進（情報交換による相互理解、園児・児童・生徒の交流活動の実施）	連携担当	幼保小の連携では、今年度、園児と児童と一緒に参加する行事が多かった。もう少し児童同士が交流できる機会を作っていく。小中連携では、様々な交流活動を行った。しかし、面談において期待に加え不安を訴える児童も多かった。今後は、アンケート調査を生かし、情報交換を綿密に行い、児童の不安を少しでも解消していく。	保育所・中学校の相互授業参観や情報交換会、児童と園児や生徒の交流活動を積極的に行っている	A：よくあてはまる（90%以上） B：だいたいあてはまる（80%以上） C：あまりあてはまらない（70%以上） D：まったくあてはまらない（70%未満）	<教員評価>(26) 100%	A 幼保小連携では、2学期以降に運動会をはじめとした連携行事があるので、年長児に安心や期待がもてるものになるよう工夫して行う。小中連携事業では、多くの活動を通して意義のある体験ができていく。今後、体験後に今の生活にどのように生かしていくかという取り組み（中学校入学前に小学校でできること）を強化して行っていく。